



東京港開港時の様子  
 出典：「東京港 埋立のあゆみ」©東京みなと館(東京都港湾振興協会)

## 東京湾岸の歴史の変遷

2020年の東京五輪の会場が集中する湾岸エリアの再開発が今注目されています。

徳川幕府の開府をきっかけに、江戸そして東京へと発展してきた日本の首都。ここでは埋め立てなどによる湾岸地形の変遷、まちづくりの今昔を辿ってみました。

**湾岸部は江戸時代の埋め立てに始まり、日本の成長に合わせて姿を変える**

江戸幕府の「利根川東遷事業」によって、利根川河口は江戸湾（東京湾）から茨城県鹿島灘に移されました。かつての利根川河口は現在の墨田区北部付近。河口一帯には広大な湿地帯と多くの砂州や干潟が発達しており、後の埋立てに適した環境が広がっていました。

徳川家康が江戸入府した1590（天正18）年以降、増大する江戸人

口の受け皿として、居住地と家庭ゴミ処理場の確保を目的に埋め立てが進められました。最初に埋め立てられたのは日比谷入江。その後、西は多摩川河口にあたる羽田から、東は江戸川河口にあたる葛西にかけて、庶民のまちが広がります。そんなまちの繁華街であった神田鍛冶町に、当社本店が開業したのは1804（文化元）年。周辺は日本橋川、楓川といった水路が巡る水運のまちでした。

**湾内の浚渫土を活用し、月島、芝浦、晴海、豊洲などが誕生**

江戸末期になると、隅田川から流れ出る土砂によって浅海化が進み、船舶の航行に支障をきたすようになってきました。そこで、航路の拡大と安全を図るため、1883（明治16）年以降、東京府が計画的に湾内の浚渫を実施することとなります。その浚渫土を使って多くの

埋立地が生まれました。月島、芝浦、晴海、豊洲、東雲、枝川、塩見、そして天王洲。湾岸部の開発が本格化した1884（明治17）年、木場に当社の東京木工場が開設されました。

東京港開港の3年後、1944（昭和19）年に、当社の技術研究所が設計部研究課として産声を上げました。戦後復興に合わせて東京港の拡充も進み、品川、大井、台場、青海、辰巳、夢の島などがつくられていきます。そして1964（昭和39）年に東京五輪が開幕。国立競技場をはじめ、関連施設の建設とともに、高速道路や新幹線、空港など公共交通機関が整備され、東

京のまちは一気に国際都市へと発展を遂げました。その後、高度経済成長からオイルショックを経て、羽田空港やレインボープリッジなどの建設による一層の都市機能強化が進められ、湾岸部は今なお進化を続けています。

**21世紀、2度目の五輪を機に新しい東京の歴史が始まる**

かつて石炭、鉄鋼、ガス、電力の専門埠頭として日本の産業を支えた豊洲埠頭は、世界最大の卸売市場である築地市場の移転先として再開発が進んでいます。また、2020年の東京五輪では、湾岸部に多くの競技施設や選手村が建設される予定です。江戸時代以降、劇的に変化した東京湾岸部の歴史に新たな1ページが加えられ、新しい東京らしいまちづくりへと繋がっていくことでしょう。

当社は東京湾岸部に本社をはじめとする主要3施設を持ち、210年の長きにわたって、その発展を見守ってきました。今後も、当社が持っている知見や技術を活かして、東京湾岸部のさらなる発展に貢献していきます。



※上記4点の図は東京都港湾局、東京都第一区画整理事務所が発表した資料を元に作成